



SINCE 1901 感謝と希望を
日本女子大学・創立100周年

図書館だより

目次

21世紀の図書館	——後藤 祥子	1
「今、学生にすすめる本」特集(その9)		
——福本 俊	時子山ひろみ	2
高頭 麻子	大場 昌子	
高橋 雅江	小林 多寿子	3
高山 博之	秋元 樹	
「上代タノ平和文庫」創設30周年記念展		4
—大学100周年によせて—		
展示「わたしたちの創る日本文学の教科書」		
——小川 靖彦		7
平成13年度夏期スクーリング開館について		
——田代 陽子		8



目白の図書館正面

21世紀の図書館

後藤 祥子

学園の創設百周年を迎えるにあたって、さまざまな機構やハードの検討があったなかに、図書館はまず最重要課題であった。すでに八十年代後半の『図書館だより』のなかに、当時文学部長であり、図書館担当理事でもいらした佐藤進先生の次のような文章が載る。

「筆者も、図書館担当理事として、日本女子大学の図書館問題に、図書予算の増額化のみならず、文化の原点を見失うことのない日本女子大の“顔”というべき図書館の近代化、近代的な図書館建設の早期の実現に思いをもっていることを、東芝資料室のことを思い浮かべつゝ、感じている」。

私どもはそうした悲願を一方に重く受け止めつつ、片や狭隘な研究室や散在する事務部門の統括を優先せざるを得なかった。その判断の抜き差しならなさを、まずは認めなければならないが、それは同時に、先送りされた新世紀の図書館構想を、いやが上にも充実した、悔いないものにしなければ、という思いに私どもを駆りたてる。ここ十年ほどの間に、諸大学は競って新図書館を建設した。そしてそれは多くの場合、いわゆる「図書館」という従来の枠に納まらず、あらゆる情報の蓄積と発信をこととする「情報センター」の役割を担っており、またそのように名付けられている。今や「紙に印刷された本」は図書館所蔵物の一部に過ぎず、膨大なデータベースやマイクロフィッシュ、フィルムやテープといったありとあらゆる形のデータが蓄積・管理され、発信される場所なのである。冒頭の引用に見える「東芝資料室」もその早い典型であろう。そうであるが故に、発展途上で進化の激しい情報世界の趨勢をしばらく見定めようとの狙いも、「後回し」の論理にはあったのだと仄聞する。たしかに、ここ十年ほどの間に、私どもの図書館利用の方法は一変した。朝出かける前に、家のパソコンを立ち上げてホームページから図書館を呼び出し、キーワードで入用本の一覧を打ち出す。あるいは真夜中に、うる覚えの書名や書肆を確認する。一度も図書館に寄れない日でも、我々はこうして、朝に晩に図書館のデータに頼らない日は無い。近代図書館の役割はいまや、万冊を所蔵すること以上に、どれだけ有用な情報を機敏に提供できるかにある。大学同志の連携も、相互に欠を補うに足りるであろう。むしろ私どもに今求められているのは、日本女子大が所蔵する稀観書や固有の資料を、いかに参照しやすい形で提供できるかであり、また学生たちにとって学習しやすい環境を、時間的にも空間的にも提供できるか、に尽きる。その実現のためには、いよいよ衆知を絞ってプランの実現に取り組まねばならない。(学長・日本文学科教授)

「今、学生にすすめる本」特集（その9）

■福本 俊（児童学科教授）

靖国神社参拝や歴史教科書など、昨今の日本の動きを見るときにどうしても読んでもらわなければという位に、いつもは学生諸君の自由を重んじている筈のふくもとセンセイがその宗旨を変えて挙げるのが『中国の旅』（朝日新聞社 1972）をはじめとした本多勝一の本です。私共の祖・父母たちが近隣の国々に対して行った犯罪的行為は、認め・償わねばなりません。それが人として当然の道です。さて気分を変えましょう。女性の手による本を2冊。『日本奥地紀行』（イサベラ・バード著／高梨健吉訳 平凡社、東洋文庫、1973）と『彼女たちの類人猿』（S. モンゴメリー著／羽田節子訳 平凡社、1993）。前者は明治初期、一人の通詞を伴いエゾ地までの道を辿った英国人の記録です。外国人女性の目に映った当時の日本の様子が興味深く描かれています。後者はそれぞれゴリラ、チンパンジー、オランウタンと共に暮らしながら研究・保護活動に生きている3名の女性研究者を描いたものです。どちらもお薦めです。

■時子山 ひろみ（家政経済学科教授）

エドワード・ウイムパー著 浦松佐美太郎訳 『アルプス登攀記』（上）（下） 岩波文庫
大学にはいるとすぐ私はワングルに入部しました。のんびり高いところから遙か彼方をゆっくり見てみたかったのです。そんなとき手にしたのが本書です。ここに書かれているのは、何日も山に入り静かに一步一步自分の足で歩いていく、そんな山行とは全く違うあたかも漁師が獲物をねらうように、知力と体力のすべてを使って目指す峰に挑む、文字通りアタックという言葉がぴったりの山登りの記録でした。英国人ウイムパーは1860年から6年の歳月を掛けてマッターホルンに挑みます。そして初登頂成功のわずか数時間後、頂上直下の絶壁で7人の登山隊のうち4人を失うという大惨事でこの本は終わっています。一緒に挑戦する男達、難しい岩場、クレヴァス、氷河、それを乗り越える技術や道具など山の話は勿論、アルプス越えの街道に出没する乞食や谷間の貧しい村々の生活などにも、素晴らしい挿絵とともに大変興味を惹かれました。

■高頭 麻子（史学科助教授）

①エミール・アジャール著 荒木亨訳 『これからの一生』 早川書房 1977年

②アゴタ・クリストフ著 堀茂樹訳 『悪童日記』 ハヤカワepi文庫 2001年

①はパリの裏町で、娼婦の子供たちを預かるユダヤ人老女に育てられているアラブ人少年、②は、第2次大戦末期のハンガリーで、祖母の元に疎開した双子の少年の物語です。いずれも社会の片隅で、親の愛も知らず、学校にも行かず、過酷な現実を自分の眼で見つめ、周囲との関係を自力で切り開き、たくましく成長していきます。①は、風変わりな人々に囲まれて、きれいごとの常識とは異なる、真の愛を求めていく心温まるお話（シモーヌ・シニョレ出演の映画もあります）です。②はさらに愛も妥協もない状況下で、自ら心身を鍛え、彼らなりの掟にしたがって明日を切り開いていく、いわばハードボイルドのような痛快さです。現代日本の子供達が、現実の厳しさや醜さからクッションで守られ、「自由」や「平等」の理想を教わり、周囲との「ふれあい」の中で「のびのび」育つはずなのに、学級崩壊や暴力、いじめ……と幸せそうでないのを見るにつけ、これから教育者や親になる人にぜひ読んでいただきたいと思います。②はわかりやすい子供の日記体なので、フランス語学習者には原作も推薦します。

■大場 昌子（英文学科助教授）

村上由見子著 『イエロー・フェイス』 朝日選書 1993年

私たちの日常生活には、衣・食分野をはじめとしてアメリカ発信のものがいたるところに浸透している。日本人は第二次世界大戦後、アメリカと密接な関わりを持つ経緯において、必然的にも、積極的にも、アメリカの文化を受け容れてきたのである。

本書の著者は、そのアメリカが日本人、さらには日本人を含む広くアジアの人々をどのように捉えてきたのか、戦後の日本人にとって身近な娯楽のひとつであるハリウッド映画をとおして検証している。何故映画かといえば、「映画というメディアは、『アメリカ人』という自己イメージをスクリーンに形成してきたと同時に、〈他者〉のイメージも繰り返し提示し続けてきた」からであるという。本書は、真の国際理解について興味深い問題提起をしていると同時に、映画のもう一つの見方、すなわち、一メディアとしての映画が果たす機能を客観視する視点を与えてくれる。

■高橋 雅江 (数物科学科教授)

シドニー・パーコウィツ著 はやしはじめ・はやしまさる訳 『泡のサイエンス ―シャボン玉から宇宙の泡へ―』 紀伊国屋書店 2001年

泡といわれて即座に思い浮かぶものは石鹸の泡、メレンゲ、ビールの泡などではありませんか？副題にあるように、泡の多様な世界が紹介されており、私たちの身の回りには泡で構成されている物質が沢山あることに驚かされることでしょう。泡は気体が液体または固体の中に包まれている構造を持っており、いわゆる「柔らかい物質」の代表として挙げられます。この頼りなげな物質は複雑な構造を作り、様々に有用な物質を生み出し、食品のみならず多方面で利用されている魅力的な物質であることが読みとれます。その上、「泡」というこれほど身近な物質がハーヴァード大学のデイヴィット・ワイツが言う「見過ごされている物質」として、まだまだ科学的に未知の物質であることもまた、皆さんにとって驚きであり、魅力的な物質ではないでしょうか？これを機に自然界の不思議に触れてみて下さい。

■小林 多寿子 (現代社会学科教授)

宮本常一著 『忘れられた日本人』 岩波文庫 1984年

日本女子大学の学生の大半は、世界有数の大都市東京を中心とする首都圏に住んでいます。これほど人口の集中した大都市で情報メディア機器に囲まれた現代の日常生活を送っていると、日本全国がまるでこのような大都市ばかりのような錯覚に陥ります。しかし、半世紀前までの日本は多くの人が農山漁村で生活する農業国でした。そしてときに厳しい自然と向き合いながら、季節のリズムのなかで暮らしていました。そのような村落生活を人びとの語りをとおして知ることができるのが、全国を旅して歩いた民俗学者・宮本常一が書いたこの本です。対馬、土佐、周防など日本のさまざまな地域の人びとの多様な暮らしと豊かな文化が描かれており、なにより村で生きる人たちの口頭の語りにひきつけられるはずですよ。かつて日本の村の生活がどのようなものであったかを知ることが、現代の都市生活を再考するきっかけにもなり、お薦めの書です。

■高山 博之 (教育学科教授)

司馬遼太郎、ドナルド・キーン著 『日本人と日本文化』 中公新書 1972年初版

新渡戸稲造著 奈良本辰也訳 『武士道』 知的生き方文庫 (三笠書房) 1993年第1刷

敗戦によって日本の伝統文化が否定され、自信を喪失した日本人は共通の価値観や道徳の規範さえも見失ってしまった。外来の薄っぺらな文化や安物のマスコミ文化に翻弄されて日本文化は将に混迷状態にある。この両書は、日本文化や日本人のモラルを見直すための好著である。

『日本人と日本文化』は、雄大な構想で日本の歴史や人物を描き続けた司馬氏と日本文化の研究者として著名なキーン氏の対談集で、外来文化の受容、日本人の美意識やモラル等々、日本文化の特色や独自性について幅広く鋭い洞察を試みている。『武士道』は、新渡戸氏が日本紹介のために英文で書いた名著である。宗教教育を行わない日本では、道徳教育の根底にあるものは武士道なのだという考えに立ち、義、仁、勇、礼、誠、名誉などその本質を述べ、欧米で大きな反響を得た。

■秋元 樹 (社会福祉学科教授)

大学院生ぐらいはと祈りつつも、どうせ誰も読もしないであろうものを推薦するのはむなしいものである。カール・マルクス『資本論』冒頭の第1章1頁と第24章「いわゆる本源的蓄積」、レーニン『資本主義の最高の段階としての帝国主義』。何を今頃マルクス、レーニンとせせら笑う事なかれ。自分が生きている資本主義とはどんな社会なのかのひとつの、そしておそらくきわめて重要な分析ぐらいは読んでおいて良い。私はマルクス、レーニンは苦手であり、未だただの一度も他人に彼らの本の推薦などしたことはないのだが、このあいだまでこれらを金科玉条のごとく語っていた日本の「インテリ」達が皆口をつぐんでしまったので、彼らに代わって推奨しよう。共産主義嫌いのアメリカの大学ですら、少なくとも社会科学系の学生ならば、これらを斜めに読むぐらいのことは求められる。賀川豊彦『死線を越えて』(1920年)。今日、多くの学生は「途上国」に関心があるようであるが、あるいはこれとのコントラストで「豊かな日本」に言及するが、ちょっと前の日本の姿を知っておいていい。加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い』(PHP研究所、1990年)。日本女子大学の卒業生の本である。彼女の猫の視察はすばらしい。対象を深く愛することなくしてこのような本は出来上がらない。あなたは自らの研究対象をこの程度に愛しているか？対象に対する愛なくして、「業績づくり」のつまらぬ文章は書くな。デービッド・F・ノーブル著、渡辺雅男、伊原亮司訳『人間不在の進歩』(こぶし書房、2001年)著者は第二次産業革命の第一次産業革命との違いを抵抗のなさに求め、同時に第一次産業革命時のマルクス、エンゲルス等の技術進歩に対する理解と対応を厳しく批判する。

「上代タノ平和文庫」創設30周年記念展 —大学100周年によせて—

日本女子大学は創立100周年を迎える本年、図書館の「上代タノ平和文庫」は、1971（昭和46）年に創設以来30周年を迎えている。図書館友の会の多大な協力を得て、11月13日より図書館玄関ホールにおいて、記念展示を行っている。



＜上代タノ平和文庫＞

上代タノ平和文庫は、本学第6代学長上代タノ先生が本学の70周年を記念して、ご自分の蔵書846冊を寄贈され、これを核として創設された文庫（図書館4階）である。

本文庫創設に当り先生は、『平和文庫寄贈について』及び『平和文庫規定』の中で、その目的は女性

性が「国際平和の問題について」問題意識を明確に持ち、平和への推進力となることを念願し」学生に「世界平和の問題に関する正確な知識と関心を深めさせ、……基礎的な科学知識を得させること」と明記されている。

以来30年、図書館友の会は、先生のご意志にある「発展する文庫」を目指して書籍、雑誌などの購入、整理などで図書館を支援し、平成12年度には全冊数6623冊、雑誌16種類（内10種類は寄贈）が収庫されている。

本文庫には平和文庫運営委員会が設置され、委員13名によって会の運

平和文庫寄贈について

上代 たの

ノエル・ベーカアは、現代で最大の公害は軍備であるといったが、今日、人類が直面している最も重要な問題は軍備縮小の問題であり、せんじつめれば世界平和の問題である。

もし、第三次世界大戦が起れば、それは人類の破滅以外の何のものでもあり得ないからである。

我々はみな、この平和の問題について大きな関心をもっている。とはいえ、果してどれだけの人が、今日どれほど「平和」がおびやかされているかをはっきり認識しているだろうか。世界平和は国連に委せておけば政治、外交、経済等の話し合いによって如何にか解決ができるであろうと楽観している人もないではない。しかし、国連は今、世界平和確保のための最も重要な課題として、まず抜本的な改組をしなければならぬことは多くの人々の認識するところとなっている。また、科学技術の進歩によって、地球はすでに小さくなったと云われている今日、この地球上の人間は、イデオロギーや民族、人種の別をのり越えて一つにまとまらなければならない—即ち連邦世界国とならねば結局真の平和をもたらすことは出来ない—と考える人々も多くなってきている。しかし現実の世界が示すように、この世界国家への道は遠く険しい。

このような世界のなかで、平和に対する日本の役割の大きいことはいうまでもあるまい。

日本は第二次大戦以後今日まで、平和の伝統を築き維持してきた上に、現在では平和憲法をもつ世界唯一の国だからである。日本が世界平和の運動に積極的に先頭に立って働くことを人類は期待しているであろうことを信じている。

最近まで平和の問題は政治家をはじめ、多く男子の仕事と考えられていたが、今日では女性の力が新たに積極的に加わることが大切であることが多くの人々によって理解されてきたことを挙げなければならない。しかし、公平にいて、平和問題に対する女性の影響力はまだ積極的建設的であるということは出来ない。もちろん、有力な婦人団体も少なくなく、男子と共に有力な与論を作り出してはいるが、女性一般の平和に対する関心や協力はまだまだ普遍化してはいないと云えよう。関心はあるても、それを平和への実現の力として生かす熱意や諸条件に欠けているのである。

この意味において、女性が国際平和の問題について問題意識を明確に持ち、平和への推進力となることを念願して日本女子大学に平和文庫の寄贈を意図したのである。

昭和46年11月

営、書籍の選書などが行われている。（図書館友の会作成・展示用パンフレットより）

<展示図書一覧>

〔書名〕	〔著編者名〕	〔出版者〕	〔出版年〕
・学び・未来・NGO	若井晋 ほか	新評論	2001
・日本・百年の針路	江口克彦	PHP研究所	2001
・平和憲法 —基礎と成立—	荒井誠一郎	敬文堂	2001
・ハリエット・ジェイコブズ自伝 ：女・奴隷制・アメリカ	Jacobs, Harriet A.	明石書店	2001
・差別と戦争：人間形成史の陥穽	松浦勉 渡辺かよ子	明石書店	1999
・ユダヤ国家のパレスチナ人	Grossman, David	晶文社	1997
・平和とは何か	奥宮正武	PHP研究所	1996
・世界平和アピール七人委員会資料集1		日本女子大学 図書館友の会	
・世界平和アピール七人委員会資料集2		日本女子大学 図書館友の会	
・今「地球」を救う本	UTAN編集部	学研	1991
・平和事典（新訂）	広島平和文化センター	勁草書房	1991
・平和事典	広島平和文化センター	勁草書房	1985
・広島・長崎 —原子爆弾の記録—	子どもたちに世界に！ 被爆の記録を贈る会	同左	1978
・軍縮交渉史 上	前田寿	東京大学出版会	1976
・軍縮交渉史 下	前田寿	東京大学出版会	1976
・戦いの中の青春 —1945年日本女子大卒業生の手記—	日本女子大43回生 文集編集委員会	同左	1975
・新渡戸稲造全集 第1巻	新渡戸稲造	教文館	1969
・新渡戸稲造全集 第16巻	新渡戸稲造	教文館	1969
・研究社英米文学評伝叢書 41 リー・ハント	上代たの	研究社出版	1936
・The history of Protestantism Vol. I	Wylie, James Aitken	Cassell	1800年代
・The history of Protestantism Vol. II	Wylie, James Aitken	Cassell	1800年代
・The history of Protestantism Vol. III	Wylie, James Aitken	Cassell	1800年代



<上代タノ先生関係展示>



- * 上代先生遺影（図書館友の会蔵）
- * 上代先生愛用聖書『旧新約聖書』（成瀬記念館より借用）
ミス・フィリップスからの献辞がある。
明治42（1909）年の降誕節に受洗した教え子の上代タノに贈られた。
- * 上代たの略年譜（『上代たの文集』p443～449より抜粋）
戸籍上は上代タノであるが、故人は好んでたのと署名した。

- * 『上代たの文集 一女性教育者の先達』

〔編集〕日本女子大学英文学科内上代たの文集編集委員会 〔出版年〕1984

- * 『名誉都民小伝』 〔出版者〕東京都生活文化局コミュニティ文化部 〔出版年〕1982
〔内容〕上代タノ先生（p83～107）

- * 『日本女子大学 上代タノ平和文庫目録』
〔編集〕日本女子大学図書館友の会 〔出版年〕1992

- * 「日本女子大学図書館だより」 No.52 1982.6
〔内容〕上代先生追悼号

- * 「日本女子大学図書館友の会 会報」 No.41・付録
1982.7 〔内容〕上代たの先生追悼号



<日本女子大学図書館友の会について>

図書館の建物の5階に、日本女子大学図書館友の会の事務室があるのをご存知だろうか。

この会は、現図書館開館一年後の1965年6月23日（創立者成瀬仁蔵先生の生誕記念日）に、本学第6代学長上代タノ先生により発足し、2001年6月に36周年を迎えた歴史ある組織である。図書館前の掲示板、或いは大学のホームページで、各種講座の案内をご覧になった方も多いと思うが、活動内容をご紹介します。

先にあげた各種講座、読書会、展示会を開催の他、文化施設の見学、文学・史跡散歩など多くの興味をひく行事を手がけている。又、本学図書館の発展のために、参考図書購入や図書館4階のコーナーにある「上代タノ平和文庫」に関する補助、学園関係資料収集や整理の補助などにご尽力をいただいている。特筆すべきこととして卒業生著作調査及び目録作成があるが、この目録は明治36（1903）年以来刊行された卒業生の著作を収載したもので、地道な作業の上に作成され、1974年に発行以来、増補・改訂版が出されている。会員に向けて会報は年3回発行され、会員名簿も発行されている。図書館1階雑誌コーナー、P017.7-N-2の書架で会報を閲覧できるので、興味のある方におすすめする。

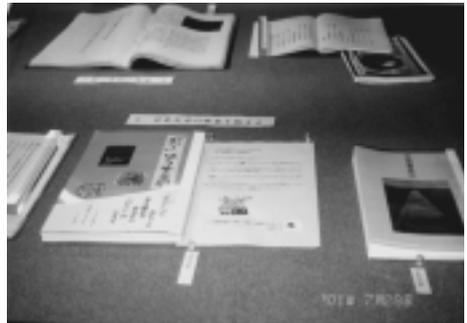
会員は普通会员、維持会員、賛助会員があるが、本学関係者でなくとも会員2名以上の紹介を受けた方は会員になれ、図書館の本の貸出を受けられる。2001年5月現在で522名の会員を抱えている図書館友の会の会員増加と、更なるご発展を期待したい。（図書館作成・展示用掲示より）

展示「わたしたちの創る日本文学の教科書」

小川 靖彦

2001年5月22日（火）より10月9日（火）まで、本学目白図書館玄関ホールにて、2000年度日本文学専攻科目「日本文学概論」の授業で受講生が制作した、日本文学の教科書を展示しました。

「日本文学概論」は、主に入学したばかりの日本文学科1年次生を対象に、日本文学を学ぶための基本的な視点や方法を講義し、また日本文学を研究するとはどのようなことかを受講生ひとりひとりに深く掘り下げてもらう授業です。必修の日本文学科1年次生に、教育職免許状や日本語教師の資格を取得するために、家政学部家政経済学科や文学部史学科の学生が加わり、約160名が受講する大人数の授業となりました。大人数であっても、受講生が真正面から日本文学に向き合うことができる方法はないかと考えた末、受講生に「日本文学」の教科書を制作してもらうことにしました。受け身に講義を聞くだけではなく、学生自身が主役となって、日本文学を他者に伝えることを試みることで、日本文学の面白さと難しさをより実感できるのではないかと考えたからです。しかも、教科書という書物の形に仕上げることは、“ものづくり”の楽しさを感じながら、日本文学全体に関する知識やそれを立体的に捉える力を身に付けることになるに相違ありません。



とはいえ、実際に教科書を作るということは、容易ではありません。果たして完成まで漕ぎ着けるかどうか、かすかな不安を感じていました。しかし、それは全くの杞憂でした。28のグループが、それぞれに教科書のコンセプトを十分に練り上げ、創意に満ちた章立てを試み、適切に作品を選び出し、興味深い解説を付けました。特に、若い感性による装丁には、本当に驚かされました。どの教科書にも、日本文学を学び始めたばかりの者の新鮮な見方と、つい1年前までは教科書を使う立場にあった者として鋭い問題意識とに満ちあふれていました。

今回は、28点のうち19点を、「1. 日本文学への序章」「2. 日本文学の世界を旅する」「3. 和歌の世界に遊ぶ」「4. 近代日本文学をたどる」「5. 日本文学史を学ぶ視点」「6. アイディア教科書」というセクションに分けて展示しました。日本語の音の楽しさをわかりやすく示したもの、文学を通じて「私」とは何かを考察したもの、日本文学を代表する短歌に詳細な解説を加えたもの、歴史的背景を十分に説明しつつ明治文学史を立体的に説明したものなど、いずれも目を見張る力作ばかりです。

受講生の皆さんは冬休みが全く無かったそうです。これらの教科書を手に取りますと、確かな何かを受講生のひとりひとりが掴んだことが感じられます。それと同時に、学生の皆さんの持つ潜在的な力の大きさに、強い期待感をおぼえました。

教科書の制作に当たり、三省堂出版局国語教科書編集室の編集長飛鳥勝幸氏にご来校いただき、ご助力を仰ぎました。また後藤祥子学長・倉田宏子日本文学科科長をはじめとする方々の強いお勧めにより、今回の展示の機会を得ました。心より感謝を申し上げます。



教科書の制作に当たり、三省堂出版局国語教科書編集室の編集長飛鳥勝幸氏にご来校いただき、ご助力を仰ぎました。また後藤祥子学長・倉田宏子日本文学科科長をはじめとする方々の強いお勧めにより、今回の展示の機会を得ました。心より感謝を申し上げます。

（日本文学科助教授）

平成13年度 夏期スクーリング開館について

田代 陽子

今年の夏期スクーリング開館は、7月26日(木)から8月30日(木)まででした。今夏も記録的に真夏日が続き、ほぼ一週間単位で行われている夏期スクーリングの講義を受けていた皆様は、健康管理の上でも大変な夏をお過ごしだったのではないのでしょうか。図書館(目白)の今夏は、盗難も急病人も無く過ぎましたが、8月22日(水)に、台風による暴風雨のために1時間早い18時閉館としました。また、利用者の皆様からの、図書館の隣に建った百年館に移転した課や研究室についての質問にお答えしたり、これまでは規定の大きさ以上の袋物の利用はお断りしていたところを、館内専用のビニール製手提げ袋を用意して、この袋には小物を入れてお持ちいただけるようにしたりと、新たな事柄がありました。百年館への研究室移転につきましては、研究室の資料の利用に制限があり、利用者の皆様には不便をおかけしました。なお、この夏期スクーリング期間より外階段の入口は閉鎖しました。閉室としていた1階の学習室スペースは、9月に工事を行い、閲覧室となっています。

利用状況につきましては、昨年と比べますと、受講者数・1日あたりの入館者数・登録者数のいずれも減りましたが、貸出冊数は増えました。また、蔵書検索のためのパソコン利用に積極的な利用者が増え続けていると実感しています。けれども、検索して所蔵していると確認したが図書館の書架に無かったということは何度か聞きました。検索語を入力して出た最初の検索結果は一覧表示ですので、閲覧したい資料のタイトルの部分(青字・下線付きとなって、次の詳細情報のページへ、リンクとなっています)を左クリックして、所蔵情報を確認してください。例えば、一覧表示で目白にあると確認しても、図書館ではなく各研究室に所蔵されている場合があります。また、インターネットのホームページですので、図書館以外からもアクセスして蔵書検索できます。貸出中の場合は所蔵情報の所のID番号と請求記号に続いて、例えば「貸出中(返却期限日:01/12/8)」と表示されるようになっていきます。貸出中の図書には予約が出来ますので、希望する方は利用カードを持ってカウンターへお越しください。

毎年、夏期スクーリング開館の期間は、講義内容に関わる資料や、書名が「リポート課題集」に掲載されている資料に利用希望が集中します。そのため通信生にはスクーリングの受講の有無に関わらず、この期間限定の利用カードを発行して、通常期よりも利用の制限をさせていただき、同一資料をより多くの方が閲覧できるようにしています。その利用カードは期間中の利用を終えた時点から回収させていただき、翌年以降も再利用しています。今年度の回収率は10月10日現在までで65.2%です。例年よりも多く、ご協力に感謝しています。まだお持ちの方は、来年でも構いませんので、来館の際にでもお返しいただければと存じます。(館員・閲覧係)

参考係利用状況(質問処理件数)

年度(日数)	13(19)	12(21)	11(15)
一般学生・教職員	107	145	77
スクーリング生・その他	64	93	51
合計	171	238	128
1日平均	9	11.3	8.5

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	13	12	11
開館日数	31	31	30
入館者数	15,490	15,883	16,784
1日平均	500	513	560
最高	616	660	699
最低	328	355	412
受講者数	2,622	2,866	2,902
登録者数	965	1,018	1,097
1日平均	32	33	37
貸出冊数	4,999	4,909	5,490
1人当たり	5	5	5
1日平均	162	159	183
最高	256	241	325
最低	85	100	86
貸出日数	31	31	30
複写枚数(2F)	59,721	62,067	67,269
1日平均(2F)	1,927	2,003	2,243
複写枚数(1F)	17,296	14,811	16,228
1日平均(1F)	558	478	541
一般学生・教職員 その他の貸出	2,560	2,674	2,262
1日平均	83	87	76

編集後記 本学100周年によせて、玄関ホールで「上代タノ平和文庫」創設30周年記念展を行っています。どうぞ一度見にいらしてください。世界平和を希求する上代先生の声が、今も聞こえてくるような気がします。

平成13年度図書館だより編集委員：田口令子、中島和子、大沼真美、田代陽子、中澤恵子

(田口)